

# Fons Sapientiae

仙台白百合女子大学図書館報 「フォンス サピエンティエ」



No.20  
2020.4.1

## Contents

- ・巻頭言 矢口洋生学長
- ・図書館リニューアルのお知らせ
- ・新着図書・CDの紹介
- ・教員の近刊共著の紹介
- ・推薦図書
- ・図書館からの報告
- ・2019年度図書館関係会議・研修会等報告



## 図書館と青春

かつてお世話になった米国人の教授は、勤める大学は給料が安くともかわらないが、まともな図書館がない所には行かないと言っていた。なるほど、研究者(特に文系の)はそういう感覚らしい。自宅に万単位の本を集積している人もいるけれど、研究するとなると数十万冊そろっていないと心もとないから、結局は図書館に依存せざるをえない。研究の質は、図書館の質に比例するものなのだろう。

今までいろいろな図書館のお世話になったが、思い出深いのは最初に留学したアメリカ西海岸の小大学の図書館だろう。その大学では1・2年生が寮に住むことを義務付けていた。したがって、学生の半数近くが学内に住んでいた。私のルームメイトはアラスカ出身で身長2メートルのバスケットボールの選手だった。相部屋は居心地が悪いから、自然に図書館で過ごす時間が長くなっていった。閉館時間は23:00で、その時間でも学生の出入りは多く、閉館後はちよつとしたラッシュ状態だった。夜道は危険なので、女子学生には女子寮までのエスコートサービスがあった。学生にとって、図書館は主要な生活空間だった。

試験が近づくと、閉館時間は延長されて24:00になった。大学によっては24時間使用可能としている所もある。勉強熱心な学生、あるいは要領が悪くて勉強が終わらない学生は、24時になるとさらに自習室へと移動した。私はその自習室で、友人と交代で仮眠をとりながら、終わる見込みのない試験勉強に励み、また自分にも理解がたいレポートを書き続けて明け方を迎えたものだった。

朝7時になると学食で朝食を食べることができた。自習室から直接食べに行く朝食は不思議と美味だった。シリアル、オートミール、ドーナツ、ベーグル……。それから部屋に帰ってシャワーを浴び、服を着替え、濡れた髪のまま8時開始の授業に出た。変な日本人だと周りのアメリカ人学生たちは思っただろう。

今でも図書館を訪れると、あの頃の無謀な生活が記憶によみがえってきて、笑いがこみ上げてくる。図書館で勉強している学生を見ると、当時にタイムスリップしたような気持ちになってエールを送りたくなる。図書館はサークルやバイトよりもよほど楽しくて刺激的なのだ。授業以上に役立つこともある(かもしれない)。学生の皆さんにはそのことを知って欲しい。そのためには図書館を探検し、慣れて、充分に活用してもらいたい。豊かな大学生活をおくるための秘訣が、そこにあるのだから。

学長 矢口洋生



## 図書館リニューアルのお知らせ

図書館では、2019年の夏休み期間中に、図書館リニューアルの一環として、入退館ゲートと図書自動貸出装置の入れ替え、図書館ホームページの全面リニューアル、および図書館蔵書検索システム(OPAC)のOPAC4への切り替えを行いました。

また、今年度より、学生有志が参加する「より良い図書館をつくるための懇談会」を開催し、学生の意見を取り入れながら図書館機能の改善を行っています。たとえば、冬の寒い日のために、こたつを設置しました。

### 入館・退館



磁気カードリーダー方式からバーコード読み取り方式へ変更し、読み取り精度をアップしました。また、各装置をライトなデザインにしてエントランスを入館しやすいイメージに変更しました。

### 貸出



図書自動貸出機も同様に磁気カードリーダー方式からバーコード読み取り方式へ変更し、読み取り精度をアップしました。画面デザインを変更して、簡単に利用できるようにしました。

### 図書館ホームページ



図書館ホームページをリニューアル。仙台白百合女子大学公式ホームページと統合し、統一したデザインとすることで、より見やすく、利用しやすくなりました。

### 検索(新着資料)



蔵書検索システムをOPAC4に変更し、検索精度アップ。見やすいデザインにも変更。また学生の要望を取り入れ、新着資料の画像表示機能も実装しました。



## 新着図書・CDの紹介

### 『熱源』 川越 宗一 著 文藝春秋



第162回直木賞、本屋が選ぶ時代小説大賞2019をダブル受賞している川越宗一氏の樺太アイヌの冒険と闘いを描く長編作品。主人公のソヴィエト軍女性下士官、クルニコワ伍長はドイツ降伏後のベルリンで狼藉を働く政治将校を私刑したことで、極東のサハリンへ転戦することに。彼女は大戦中に恋人を失い、自身の心をも失っていた。サハリンでは降伏した日本軍と住民が復員を進める中、ソヴィエト軍の進攻が始

まった。戦闘で日本軍の捕虜となったクルニコワ伍長は戦いの終結を願うアイヌ人イペカラの決死の行動に何をみたのか。様々な民族が同居する島をめぐる闘いの中、大国の意思と一人の人間が平和を願う思いが交錯する感動巨編。歴史物ですが漫画『ゴールデンカムイ』にも通じる設定で楽しく読めます。

### 『アンジュと頭獅王』 吉田 修一 著 小学館



現代の世相を反映した作風で様々な文学賞を受賞している吉田修一氏による、説経与七郎正本「さんせう太夫」を現代風にリファインした作品。時は中世、信夫（福島）から筑紫（福岡）へと流罪となった父を訪ねる旅を続ける母とアンジュと頭獅王（ずしおう）の一行がお互いに引き離され様々な苦難を受けながら、姉のアンジュの犠牲で漸く逃れることできた頭獅王が僅かな希望を頼りに一人旅立つお話。

苦難続きの頭獅王に道中手を差し伸べる人が現れて……。時空を超えた急展開の勧善懲悪のストーリーと不思議な古文体にいつの間にか引き込まれ、思わず笑いがこみ上げるような無上のファンタジーを体験できる一冊です。古典の苦手な方にもオススメです。

### 『みちづれの猫』 唯川 恵 著 集英社



2002年に『肩ごしの恋人』で第126回直木賞受賞を受賞している唯川恵氏作品。『ミヤアがそろそろ旅立ちそうです』。母からの連絡で、東京から実家の金沢へと急ぎ帰省する女性の回想から始まります。20年前、小さな背中に雪が積もり震える子猫を拾った父と母、きょうだい3人の家族はミヤアが絆となり一緒に暮らしてきた。その日と同じような雪の日に旅立っていったミヤアが、今は離れ離れに暮らす家族

に残した「ミヤアの通り道」の他、計7編の短編からなる本書は、女性が生活する中での心の揺れ動きに対応するように寄り添う猫の存在と心の救いについて描かれています。各編の主人公と自分を重ねて読むことのできる、悲しいけれどあたたかい短編集です。猫好きの方にもぜひ。

## 教員の近刊共著の紹介

### 『ソーシャルワーカーのための研究ガイドブック』

日本ソーシャルワーク学会 監修 中央法規出版  
心理福祉学科 教授 白川 充



この本は日本ソーシャルワーク学会が3年の歳月をかけて作り上げたものです。発案は亡くなった大阪市立大学の岩間伸之教授と日本福祉大学の保正友子教授だったと記憶しています。その後、学会の第3研究推進委員会メンバーが編集委員となり（白川が編集委員のひとり）、企画立案・編集・執筆作業を行うことになりました（何度、中央法規本社ビルに通ったことか……）。

この本のモチーフは以下の通りです。ソーシャルワーカーは研究する（はずである）。そのソーシャルワーカーが実践研究にどのように取り組むのかをわかりやすく学べる本をつ

くこと。ソーシャルワーカーが初めて研究に取り組む際のプロセスを基礎から解説し、研究デザイン、研究倫理、データの集め方、分析方法、学会発表、学会論文のまとめ方等に加え、実際の研究も紹介・解説しています。

ところで日本におけるソーシャルワーカーとは誰なのでしょう。社会福祉士なのか、精神保健福祉士なのか。何れにしても専門職であるならば研究するはず。研究のできるソーシャルワーカーを目指す学生の皆さん、関係者の皆さん、是非ご一読ください。

### 『子どもの「食べる楽しみ」を支援する』

日本健康栄養システム学会 監修 建帛社  
健康栄養学科 准教授 山城 秋美



特別な支援を必要とする子どもの「食べる楽しみ」の充実という点に着目した栄養ケアマネジメントの具体的な方法を提案する解説書です。子育て支援と食育について、支援の必要な子どもの食行動の実際の事例の紹介、その対策や指導法、関連する保健福祉施策などについても解説されています。子どもの「食べる楽しみ」という、見過ごされがちだけれどもとても大切なテーマを解説する本書は、栄養や保育に

関係する専門職を目指す方をはじめ、将来の子育てを考える方、子どもに関わる全ての方にぜひ一度読んで頂きたいと思います。

### 『保育内容「健康」』 重安 智子・安見 克夫 編著 ミネルヴァ書房

人間発達学科 特任教授 佐野 裕子



親の価値観や生活スタイルが変化し、子どもを取り巻く環境も急激に変化し、子どもたちの心と体の健康をどう守るかということが重要な課題となっています。それに合わせて幼稚園や保育所、認定こども園等では、子どもたちの健康の保持・増進を図っていく必要があります。子どもたちの丈夫な体、豊かな心、体力や運動能力・意欲等を育むために子どもたちの生活のあり方を考えていく上で、やさしい解説や豊

富な実践例も掲載した本書は初学者必携のテキストとして役立つ一冊です。





## 推薦図書

### 『82年生まれ、キム・ジョン』 チョ ナムジュ 著 筑摩書房

人間発達学科 講師 千凡晋



主人公のキム・ジョンはタイトル通り、82年生まれの、周りで見かけるごく普通の女性の一人です。多くの女性の生き方がそうだったように、ジョンもある家庭の娘として生まれ、勉学と仕事に励むうち愛する人の妻となり、一人娘の母親になることで、結局仕事を辞め、育児と家事に追われる日々を過ごしています。この物語では、語り手である精神科医により、彼の患者であるジョンの人生が淡々と語られています。ジョンの人生は一人の特別な告白ではなく、我々の母、姉妹、または未来の皆さんの姿を

象徴しているかもしれません。この本は、一人の女性の姿を通して未だに韓国、日本、いや、全世界に潜在している女性差別に対する問題意識を提起しています。著者の言葉を借りて、大人として成長の第一歩を踏み出した皆さんのために祈りたいと思います。「娘が生きてる世の中は、私が生きてきた世の中より良くなっていくとはなりませんし、そう信じ、そのようにするために努力しています。世の中のすべての娘たちがより大きく、より高く、より多くの夢を持つことができるように願っています。」

### 『障害を持つ息子へ ～息子よ。そのまま、いい。～』 神戸金史 著 ブックマン社

心理福祉学科 准教授 茂木 千明



2016年7月に起きた相模原殺傷事件の犯人による「障害者なんていなくなればいい」という言葉は衝撃的でした。この犯人の発言に対する思いから生まれた『障害を持つ息子へ』という詩。自閉症の息子を持つ父親のフェイスブックに書かれたこの詩は、大きな反響を与えました。英訳や中国語訳にもなりました。

本書では、この詩を書いた父親の報道という仕事(立場)を通して、これまでの息子(障害)と向き合ってきた過程が綴られています。

勉強やスポーツはできないよりできた方がいい、学歴や収入も高い方がいい、病気や障害もない方がいいに決まっているといった誰もが持ち得る「内なる優生思想」と、目の前にいる障害を持った息子。当事者家族の問題だからとは片付けられません。この問題は、自身(人間)の存在価値を問うことにもつながっています。

この本は文字も大きく行間も広く、筆者のご家族や息子さんの写真も多数あって、読みやすいです！

### 『生きがいについて』 神谷 美恵子 著 みすず書房

健康栄養学科 准教授 氏家 幸子



私はNHKの「100分de名著」が好きで時々見えています。先日取り上げていた「真観政要」も真のリーダー性やチーム力など現代社会に当てはめた解説が面白く見入ってしまいました。こんなきっかけでもないかぎり手にする事のない本との出会いは、いろいろな視点や視野の広さを与えてくれるので、この番組はお勧めです。

そのシリーズの一つとして以前取り上げられたのが神谷美恵子氏の『生きがいについて』でした。神谷美恵子氏は、精神科医で作家でもあり、皇太子妃だった頃的美智子様の相談相手だったことで知られ

ています。彼女を医学の道に駆り立てたのはハンセン病患者への思いでした。そう、この本が書かれたのも彼女が生きた時代も大正から昭和の時代のことです。なのに、なぜこんなに共感できるのでしよう。

それは現代が物的な豊かさより心の豊かさを求める時代だからです。心を豊かにし、幸福度をアップするために「生きがい」は欠かせません。真の「生きがい」をどのように手に入れるのか、この本を手にとっていたら嬉しそうです。

### 『働きたくないイタチと言葉がわかるロボット 人工知能から考える「人と言葉」』 川添 愛 著 朝日出版社

グローバル・スタディーズ学科 准教授 熊谷 健二



最近、スマートフォンの音声アシスタントやスマートスピーカーなど、人間の音声を認識し応答する機械が増えています。それらは一見言葉を理解しているように見えますが、実のところ言葉の意味を理解しているわけではありません。2011年に始まった「東ロボくん」(ロボットは東大に入れるかプロジェクト)も問題文の理解がネックとなり、東大合格のレベルには至っていないようです。このように、人間の言葉がわかる機械(人工知能:AI)を作るのは、現状ではなかなか困難なのです。

この本では、囲碁や将棋で人間に勝ったり自動運

転などもできたりするAIがなぜ言葉の意味をきちんと理解できないのかを、イタチが主人公の楽しい物語と解説を織り交ぜながら説明してくれます。言葉がわかるAIの開発をテーマに説明は行われますが、発言の意図が正しく伝わらないことが原因のトラブルは、SNSのような特に文字だけによるコミュニケーションの際には人間同士でも起こります。この本にはそのようなトラブルを回避するためのヒントも数多く見つかります。また、本書に出てくる版画による動物イラストも絵本風でとても素敵です。



# 図書館からの報告

## (1) 石澤良昭氏(元・上智大学学長)講演会を開催

2019年12月22日(日)、14:00から16:00、仙台国際センターにおいて、仙台白百合女子大学図書館・地域貢献研究センター主催「国際ボランティア活動をアジアの現場で30年——人を育てアンコール遺跡を守る:救うのは遺跡も人間も——」という演題による、石澤良昭先生の講演が開催されました。

石澤良昭先生は、元上智大学学長で、現在上智大学アジア人材養成研究センター所長です。

先生のご専門は東南アジア史。30年以上にもわたり、カンボジアの世界遺産アンコール遺跡の保存・修復に力を尽くされ、現地で修復職人を育てるとともに、研究したいカンボジア人の学生を日本に呼んで、日本語・英語(あるいはフランス語)の習得から専門研究の学位をとって母国の研究者になるまで人材を養成するというボランティアを続けていらっしゃいます。

内戦で傷ついていた民族の誇りを、アンコール遺跡をとおり取り戻すことができたという長年にわたる奉仕活動が認められて、2017年、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞されました。

講演会では、270人以上の方がご来場くださいました。先生がカンボジアに興味をもたれるきっかけとなった、学生時代の恩師ポール・リーチ神父様のお話から、国際奉仕活動のありよう、そしてアンコール・ワットの石がどのように運ばれて積み重ねられていったのか等といったミステリーの解明まで、多岐にわたるお話がスライドによって展開され、時間の経つのを忘れてしまうくらいでした。

強靱な精神力と優しさを兼ね備えた先生のお人柄をお話から窺うことができましたし、いわゆる「共生」の大切さとすばらしさを実感することもできた講演会でした。石澤良昭先生、ありがとうございます。



講演会の様子

## (2) めざせ★図書館クイズ王

図書館では10月26日(土)、27日(日)の2日間、白百合祭のイベントとして、館内の図書等を参考にした毎年好評のクイズを開催いたしました。今年度は「めざせ★図書館クイズ王」と名称を改め問題数を見直し、より親しみやすい形で多くの方に全問正解の賞品をお渡しできるようにしました。

全問正解賞には新グッズとして、本学卒業生でイラストレータの杉原明(PN)さんの図書館オリジナルバッグを追加し、白百合マークのキーホルダーと並んで大変好評でした。また、参加賞の「お菓子のつかみ取り」は大人から子どもまで夢中で取り組む姿が見られ、ご参加いただいた皆様により楽しんで頂ける企画となりました。

土曜日は前日の大雨の影響が心配でしたが、124名と例年より多くの方々にご参加いただき、日曜日は参加者が132名と更に増えました。

ご記入いただきましたアンケートには、「難しかった」「親子で楽しめました」「探るのが大変だったけど楽しかった」「本を探して、答えを見つけたときにワクワクした」と様々なご意見をいただき、皆様楽しんでいただける問題作りの難しさを改めて感じました。また、「たくさん本があつて利用してみたい」「資料の場所がわかりやすかった」「また来なくなる図書館」といった図書館の印象についてのご感想も多くいただきました。

また来年度の開催に向けて準備を進めてまいりますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。



めざせ★図書館クイズ王



お菓子のつかみ取り

## 2019年度図書館関係会議・研修会等報告



### 私立大学図書館協会東地区部会総会

6月14日(金)に行われた私立大学図書館協会東地区部会総会に参加。館長会では「機関リポジトリとオープンアクセス～研究データのオープン化～」について意見交換が行われた。続いて行われた研究講演会では「大学図書館における研究支援について」(講師:慶応義塾大学三田メディアセンター事務長 市古みどり氏)という題名で大学図書館をとりまく環境変化とそれに対する対応について、講師の勤務先を例に、急速に電子化が進む中での具体的な取り組みについての説明があった。

### 日本カトリック大学連盟図書館協議会総会

7月5日(金)聖心女子大学で開催された総会に参加。次期当番校は東北・信越ブロックの本学・上智大学・清泉女子大学・清泉女学院大学の4校。会場校は本学に決定した。講演は2件、「人生に寄り添う音楽:ホスピス緩和ケアの現場から」(東京純真大学客員教授 鏡山陽子氏)、「歴史に学ぶ宗教事情—潜伏キリシタンがなぜ世界遺産に?—」(聖心女子大学学長 高祖敏明神父)。人生の終末に臨む人の心を音楽がいかに癒しを与えるのか、また、長崎県の潜伏キリシタンの迫害の歴史が世界遺産登録に向けた取り組みについて学ぶことができた。

### 第80回記念私立大学図書館協会総会・研究大会

8月29日(木)、30日(金)に、帝京大学で開催された総会・研究大会に参加した。総会は帝京大学のプ

ロモーションビデオ放映から始まり、前年度の報告と次年度の計画、図書館が主体的に取り組んだ研究への授賞が行われた。続く記念講演は、江夏吉樹氏(帝京大学経済学部長・国際経済学部長)による「太平洋戦争開戦前後、羊毛輸入に携わったシドニー駐在の日本人商社員たち」という演題で、図書館員の知識・情報により研究者がいかにか「踊らされて」研究を構築していけるのかという刺激的なものだった。意見交換会は大盛況で図書館長より図書館員同士の交流が多い様であった。休憩時間を使い、図書館を見学した。レポートを書くサポーターがいて、3・4年生がアルバイトしている。蔵書数70万冊以上の大規模図書館だが、学生の手書きの「おすすめの本」というポップが館内の至る所に貼られ、図書館員が「共読サポーター」の活動を促す。学生主体の図書館を目指している印象があった。2日目の研究大会では、午前中に2018年度海外認定研修・海外派遣研修報告があった。午後は帝京大学理事長・学長の沖永佳史氏の「歴史をしるぐ未来に向かって(おもしろい大学)をつくりたい」という挨拶から始まり、鎌田和宏氏の(帝京大学教育学部初等教育学科教授)「読書で(学び)をデザインする」という共読ライブラリーと共読サポーターの実践報告があった。同氏は近年の読書離れ傾向について、読書スイッチを入れるには、本の魅力を伝えることや読み合うコミュニケーションづくりに鍵があると述べた。理事長・学長を含む教職員の

協力を得て、大学全体を図書館と見做し、生き方を育てる読書の大切さを啓蒙する活動として、本を勧めること、読み方を伝えること、読みたい心に火をつけることの3つを行うことを提唱していた。大規模な帝京大学図書館の方法はそのまま適用できないが、学生主体の読書活動は本学見習い。また、主体的な図書館員の活動が一層できるような環境作りも検討するべきである。図書館の活性化は、帝京大学と同様、大学・教職員全体の理解と協力が必要であると感じられた。

### 東北地区大学図書館協議会総会

9月20日(金)、山形大学小白川キャンパスにて行われた第74回東北地区大学図書館協議会総会に参加した。総会では、平成30年度の活動報告と令和元年度の事業計画・予算の発表があり承認された。承合事項としては、①教材の電子的配信について、②所蔵資料の除籍基準について、③学位論文を基にした研究紀要の投稿に関しての3件が国公立別の分科会で意見交換が行われた。講演会では、国際教養大学特任教授で図書館長の加藤信哉氏より「大学図書館の今までとこれから」という題で講演があった。大学図書館のこれまでの30年間の政策の流れを振り返りながら、大学図書館の未来像を予測し、図書館機能の強化と革新に向けて機能と役割を再検討し、サービスの充実を考えていく必要があるということが話された。

## 障がいのある方へ

障がいを持つ方の図書館利用に関する質問や案内、サポート等に対応します。希望する場合は図書館スタッフにお申し出下さい。図書館は、バリアフリー設計となっております。

図書館報バックナンバー <http://sslibrary.sendai-shirayuri.ac.jp/>